

目次

はし が き 一

第一章 作者推定への手がかり 九

第二章 『今昔』と『俊頼髓脳』 二四

(一) 『今昔』説話の出典の一としての『俊頼髓脳』 二四

(二) 『今昔』における『俊頼髓脳』の受容相 二七

聖徳太子と飢人の話 役行者の話 婆羅門僧正と行基の話 三輪山伝説の話 姨捨山伝説の話
蟬丸の話 秦の趙高が二世皇帝に対し、馬を指して鹿なりと強弁する話 張騫が天の河を見てく
る話 王昭君の話 玄宗皇帝・楊貴妃の話 呉松孝の話 孔子の馬・牛問答の話 玉造り卍和の
話 蘇武の話 京極殿で霊が秀歌を詠吟する話 「かぞいろは」の歌話 「あさもよひ」の歌話
萱草・紫苑を植えた兄弟の話 藤原惟規が越中国で死ぬ話 大斎院と藤原惟規の話

第三章 『今昔』・『宇治拾遺』間の同一話に見られる〈へありき〉の問題 三二

(一) 『宇治拾遺』で「けり」とあるのを『今昔』で「き」としているケース 三九

善珍(禪智)内供の話 高階俊平の弟の算の話

(二) 『宇治拾遺』・『今昔』ともに「き」とするケース 四九

橋季通が危機を脱出する話 藤原明衡が危難にあり話 相撲人大井光遠の娘が盗人を退散させる
話 左京属の、邦利延が迷わし神に逢う話

(三) 『宇治拾遺』の話で「き」とあるのを『今昔』で「ケリ」としているケース…… 101
 源頼信が平忠恒を討つ話 鯨を食って悶死した僧の話 羊に生まれかわった娘を殺す話 優婆塞
 多の弟子の話 孔子が盗跖にやりこめられる話

第四章 『今昔』・『宇治拾遺』間の同一話に見られるへこのごろあるへこ
 のあるへ等の問題 …………… 114

高価な玉を手に入れた話 剛力の牛を冥途の人が借りる話 相撲人成村が強力の学生に出会う話
 第五章 『今昔』・『宇治拾遺』間の同一話以外の『今昔』話中、「有キ」の見
 えるもの …………… 113

- 卷一九第三六話「薬師寺舞人玉手公近値盗人存命語」 卷二四第三〇話「藤原為時作詩任越前守語」 卷二四第三七話「藤原実方朝臣於陸奥国説和歌語」 卷二四第五二話「大江匡衡和琴説和歌語」 卷二六第五話「陸奥国府官大夫介子語」 卷二六第一八話「観視聖人在俗時値盗人語」 卷二七第一六話「正親大夫若時値鬼語」 卷二七第二二話「美濃国紀遠助値女靈逐死語」 卷二七第二八話「白井君銀提入井被取語」 卷二七第二九話「雅通中将家在同形乳母二人語」 卷二八第二六話「安房守文屋清忠落冠被咲語」 卷二八第三一話「大藏大夫藤原清廉怖猫語」 卷二八第三二話「山城介三善春家恐蛇語」 卷二八第三三話「大藏大夫紀助延郎等唇被咋亀語」 卷二八第三六話「比叡山無動寺義清阿闍梨鳴呼絵語」 卷二八第四三話「傳大納言得鳥帽子侍語」 卷二九第八話「下野守為元家入強盜語」 卷二九第一二話「筑後前司源忠理家入盗人語」 卷三一第一五話「大藏史生宗岡高助傳娘語」 卷三一第七話「右少弁師家朝臣値女死語」 卷三一第一〇話「尾張国勾経方妻夢見語」

第六章 『今昔』・『宇治拾遺』間の同一話の検討 …………… 116

- 龍樹・提婆の伝法の話 九色の鹿の話 天竺の牛飼いが穴に入って石になる話 秦始皇の時、天竺僧が渡来した話 震旦の人が亀を川に放つ話 羊に生まれ代った娘を殺した唐人の話 孔子と榮啓期の話、孔子と盗跖の話 慈覚大師が頼頼城に行く話 叡実持経者の話 敏行が冥途から還る話 菩提講を始めた聖の話 鎮西に下った女が、賊難を観音に助けられる話 地藏像を造る仏師を養い、死後蘇生した男の話 三条太皇太后宮の出家と増賀の話 伊吹山三修禪師の話 相撲人海恒世が蛇と力競べする話 播磨守為家の侍、佐太の話 猿神への生贄を止めさせた狐師の話 平中と本院侍従の話

第七章 『古本説話集』と『俊頼髓脳』・『宇治拾遺』・『今昔』の間に見られる同一話の検討 …………… 114

(一) 『古本』上巻の諸説話 …………… 114
 賀朝の話 継子小鍋の歌の話 或女房鏡を売る話 大隅守の話 河原院の話 季繩少将の話 木こりが山守りに斧を取られた話 伯の母の話 伯の母の仏事と長柄の橋の切れの話 木こりの童が隠題の歌を詠む話 高忠の侍が裸を題にして歌を詠んだ話 貫之が土佐から帰る時、亡き子を考えて詠んだ歌の話 長能道済の話 伊勢御息所の話 大斎院の話 公任の和歌の話 道信、亡父の喪明けに和歌を詠む話 六の宮の姫君の話 孟蘭盆に貧女が詠んだ歌の話 阿陪仲磨の「あまのはら」の歌の話

(二) 『古本』下巻の諸説話 …………… 101

- 興福寺建立の話 観音の利益を得た田舎娘の話 清水寺観音が検非違使忠明と幼児の命を助ける

話 西三条大臣の若君が百鬼夜行に遇う話 仁王経の靈驗を示した極楽寺の僧の話 成合観音の話 留志長者の話 清水寺二千度詣でを雙六の賭け物にした男の話 貧しい侍が長谷観音のご利益に預かる話 真福田丸の話 伊良縁世恒が毗沙門から米を賜わる話 吉祥天女像に恋した鐘つき法師の話 龍樹が隱形薬を用いて后妃を犯す話 観音が蛇に化して鷹取り男を救う話 信貴山縁起の話 信濃国のおとう観音の話 関寺牛仏の話

第八章 『今昔』と『江談抄』……………三六二

三善清行・紀長谷雄口論の話 村上帝が菅原文時と詩の優劣を論じる話 大江朝綱家の尼が詩の読みを正す話 天神がわが詩の読み方を夢で示す話 藤原資業の詩を義忠が非難する話 忠輔が異名を付けられる話 源顕定が閑を出す話 民部卿忠文の鷹の話

むすび……………三九二

第一章 作者推定への手がかり

『今昔』作者は全巻中のあちらこちらに、さほど明らかな形ではないがその影を落としているようである。これを徐々に提示してゆきたいが、まずはじめに作者推定の手がかりとなると思われるものを次の三話の中から取りあげて順次検討してみよう。

- (1) 卷一第一三話「聖武天皇始造東大寺語」中に見える一語、「田上」。
- (2) 卷一五第三八話「伊勢国飯高郡尼往生語」中に見える一語、「此石山寺ノ真頼」。
- (3) 卷二七第一話「三条東洞院鬼殿靈語」中に見える一語、「此ノ三条」。

(1)―卷一第一三話は表題どおり、聖武天皇が東大寺を建立する話である。それは、はじめに大仏および寺塔の造立を述べ、次に大仏並びに諸具に黄金を塗る次第を記す。塗るべき黄金が手に入らず、天皇が困惑していると、ある僧が、金峰山の神に祈るべきであると進言する。そこで東大寺建立の責任者良弁僧正が金峰山の神に祈請すると、夢に僧が現れ、「近江の勢田の南にある椿崎の石の上に如意輪観音像を造ってこれに祈れ」と告げたので、良弁はその地に行き、仏像を造り堂を建てて祈請した。すると、陸奥・下野の両国から砂金が献上されたので、これをもって大仏に塗った。如意輪観音は今の石山である、という話。

この話の、金峰山の神の夢告と、それに続く本文は次の如くである。――

夢ニ僧来テ告テ云ク、「此ノ山ノ金ハ、弥勒菩薩ノ預ケ給ヘレバ、弥勒ノ出世ノ時ナム可弘キ。其前ニハ難分シ。我レハ只護ル計也。近江ノ国、志賀ノ郡、田上ト云フ所ニ、離タル小山有リ。其山ノ東面ヲバ椿崎トナム云フ。様々ノ喬立

第四章 『今昔』・『宇治拾遺』間の同一話に見られる〈このごろある〉・
〈このある〉等の問題

1、高価な玉を手に入れた話

○『宇治拾遺』第一八〇話「玉の価はかりなき事」

○『今昔』卷二六第一六話「鎮西貞重従者於淀買得玉語」

両話の冒頭文は次の如くである。

○『宇治拾遺』——これも今は昔、筑紫に大夫さだしげと申者ありけり。このごろある箱崎の大夫のりしげが祖父なり。そのさだしげ、京上しけるに、故宇治殿に参らせ、又わたくしの知りたる人々にも心ざむとて、唐人に、物を六七千疋が程借とて、太刀を十腰ぞ質に置きける。

○『今昔』——今昔、鎮西ノ筑前ノ国、□ノ貞重ト云勢徳ノ者有ケリ。字ヲバ京大夫トゾ云ケル。近來有ル管崎ノ大夫則重ガ祖父也。其貞重ガ□ノ輔ノ任畢テ上ケルニ、送りニ京上ストテ、宇治殿ニ参ラセム料、亦私ニ知タル人ニモ志サント、唐人ノ物ヲ六七千疋許借テケリ。其質ニ、貞重吉キ大刀十腰ヲゾ置タリケル。

『宇治拾遺』の「さだしげ」「のりしげ」はもとは漢字で書かれていたといえないこともないが、『今昔』の「貞重」「則重」が正しい表記であるとすれば、『宇治拾遺』『今昔』の作者のいずれかまたは双方が、この人物について多少とも知識があったといつてよからう。それはともかく、『今昔』は『宇治拾遺』の文に拠りながら、貞重について、「字ヲバ京大夫」と加筆し、上京の理由を書き入れているのは、『今昔』作者が貞重の孫則重を知っているからであり、それが「近來有ル」に結びつくといえる（□ノ輔」の欠字は人名であり、「輔」は「介」であつて、〈何某が筑前介の任が終つて〉の意である。作者はその人名を失念したか、わからないから欠字にしたものと思われる。その「近來有ル」が『宇治拾遺』にも「このごろある」として書かれているから、その話の作者も則重を知っているということになり、両作者を同一人とする可能性がいえそうである。となれば、『宇治拾遺』の話を書いた時は「京大夫」や□ノ輔云々のことを知っていながら書かなかつたのである。また、『宇治拾遺』の話に「故宇治殿」とあるのが、『今昔』では「故」が除かれている。「故」の有無はさして問題でないが、「宇治殿」は藤原頼通。頼通は永承二年二月（一〇七五）没であるから、『宇治拾遺』の話はその年以降に書かれたものということになるが、「故宇治殿」と記したところに、没年よりさほど遠くない時期といえるかもしれない。『今昔』が「宇治殿」としたのは、これを書いた時点がさらに下っているからであろう。

さて、右記の冒頭文はこの話の前置きであつて、次に本題の内容についてその概要を述べるが、『宇治拾遺』は前後二つの話を連ねている。

『宇治拾遺』の話——（前半）十本の太刀を質において唐人から品物をゆずり受けた「さだしげ」が、上京して宇治殿に贈り物をし、筑紫に帰ろうと淀のあたりに止めてある船に乗っていると、物売り舟が近付いてきた。「さだしげ」の下人が出てゆくと、物売りの男が袴の下から一個の玉を出し、買ってくれというので、下人は水干を与えて玉を買った。さて、博多に帰りついた「さだしげ」が、さきの唐人に会つて話をしてる時、かの下人がやつて来て、淀で手に入れた玉を唐人に見せると、驚いて、高い値段でそれを売ってくれという。売るのをしぶっていると、唐人が「さだしげ」に対し、下人の持っている玉がぜひほしいという。「さだしげ」は下人を呼んで玉を召し上げ、唐人に与えた。すると、前に質に置いた太刀十本をすべて返してよこしたので、「さだしげ」は驚いた（「さだしげは、あきれたるやうにてぞ有ける」。

——（後半）筑紫の「たうしせうず」から聞いた話として、以下のことをのべる。すなわち、「たうしせうず」が、道である男から小さな玉を買わないかと言われ、家に連れ帰つて絹六十疋で買い求め、その玉を持って唐に渡つたが、種々の事件に遭遇したのち、玉を唐綾五十疋と交換したという話である。